人間発達学研究　第11号
61-62　2020年３月

■学位論文内容要旨

演奏者の身体の動きが聴取者の演奏評価に及ぼす影響に関する実験的研究

劉　暢（2019年度終了）

研究背景と目的

演奏者の動きは，音楽演奏において様々な役割を果たしていると考えられる。そのひとつは，演奏者と聴衆のコミュニケーションである。演奏における視覚の効果を検証した先行研究では，音楽が単独で提示された場合に対して，音楽と演奏者の身体の動きが同時に提示されるほうが，より演奏者が表現を意図する感情（喜び，悲しみ，恐れなど）が聴き手に伝わるという知見が得られている。音楽は確かに音という聴覚情報が主体となる行為であるが，そこに身体の動きという視覚情報が加わることによって，より明確な演奏者と聴き手の間のコミュニケーションが可能になると言えよう。ライブやコンサートなど生演奏の魅力のひとつもこの点にあると思われる。

ところで，音楽演奏において聴き手が抱く印象は，感情以外にも多くのものが存在する。そのひとつとして「評価」が挙げられる。我々は演奏を聴いたとき，多かれ少なかれその演奏が上手か下手かを判断することがある。その判断はまずは音でなされると考えられる。では，演奏評価において演奏者の身体の動きという視覚情報による影響はあるのであろうか。

演奏中の動きと言ってもその大きさの程度は様々である。大げさな動きの音楽家もいるし，全く動かないように見える音楽家もいる。一般的には，身体の動きは最適な水準で提示される必要があると想像される。例えば，静かな楽曲での大きな動きは大げさな演奏になってしまうかもしれないし，逆にあまりに動きが少なすぎると堅苦しい感じになって，演奏評価に悪影響を及ぼしてしまう可能性も考えられる。それでは，演奏楽曲の特性と演奏時の動きの大きさは，聴き手の演奏評価にどのように関連しているのであろうか。

本研究では，(1) 異なる演奏レベルの演奏者の身体動きが演奏評価に及ぼす影響，(2) 演奏評価における楽曲の動的特性と演奏者の身体動き大きさの関係性，というふたつの点について実験室的な環境で調べることによって，演奏評価における演奏者の身体動きがもたらす影響に関する新たな知見を得ることを目的とする。

実験

実験1では，初級者と上級者のピアノ演奏の音響および動画を別々に収録し，演奏者の音刺激，映像刺激，音と映像を組み合わせた視聴覚刺激を作成し，それらに対する評定実験を実施した。

実験2では，「動的な曲」「静的な曲」という動的特性の異なる2曲を用い，上級者のピアニスト1名が対象楽曲を演奏した音響に，「抑えた身振り」「中庸の身振り」「大きな身振り」の3種類ずつの身体動きの映像を組み合わせた刺激を作成し，それらに対する評定実験を実施した。

協力者は，4年制大学の学生22名である。協力者は提示される刺激を視聴し，実験1では各刺激の「演奏の良さ」と「演奏者の腕前」について，実験2では「演奏の良さ」について，どちらも7段階で評価を行った。また実験2では，評価理由も記述した。

結果と考察

実験1

視覚刺激を単独で提示した場合でも，協力者は演奏者のレベル（初級・上級）を有意に区別することができていた。

また，音と映像刺激が単独で提示された場合に比べ，視聴覚刺激では評定値がそれぞれの演奏者のレベル（初級・上級）をより強調するような方向に有意に変化していた。これは，演奏評価に対する演奏者の身体動きの影響を裏付ける結果であると考えられる（図1上部）。

さらに詳しい分析を行ったところ，演奏者のレベルが音と映像で一致している場合より，不一致の場合のほうが演奏者の評価に及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。加えて，この影響の大きさについて，音と映像の間に差はないこともわかった（図1下部）。

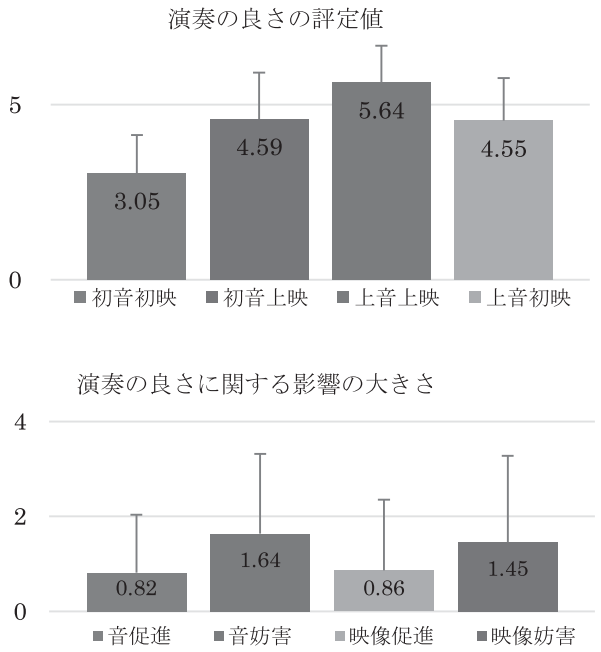

図1

実験2

「静的な曲」と「動的な曲」の両曲において，演奏者の身振りの大きさに対する評定値の間には有意差が認められなかった（図2）。この結果は，楽曲の動的な特性に関わらず，演奏者の身体動きの大きさが聴き手の評価に影響を及ぼさないことを示している。

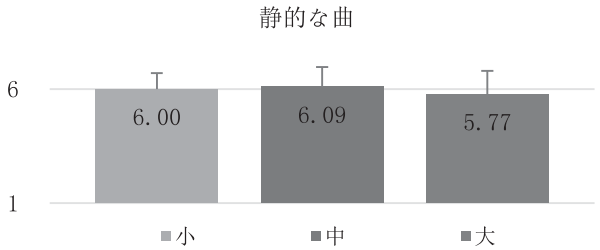

図2

評価理由では，楽曲の動的特性を強調するような身体動きが逆効果として作用する場合があることを窺わせるようなコメントが見られた。

結論

以上の実験から以下のようなことが明らかとなった。

① 映像刺激のみでも適切な演奏評価がもたらされる。
② 音刺激と映像刺激それぞれの評価に対する影響の大きさには差がない。
③ 音刺激と映像刺激が「妨害」効果として組み合わせた場合，「促進」効果として組み合わせた場合よりも効果が大きい。
④ 楽曲の動的な特性について「静的な曲」「動的な曲」ともに，「抑えた身振り」，「中庸の身振り」，「大きな身振り」それぞれの評価に対する影響の大きさには差が認められない。

これらのことから，異なる演奏レベルの演奏者の演奏評価については「演奏者の身体動きという視覚情報のみでも演奏評価をすることが可能である」こと，「聴覚情報と視覚情報が組み合わされた情報において，視覚情報による演奏評価への影響は存在するものの，聴覚情報と比較してその大きさが大きいというわけではない」という結論が得られた。また，楽曲の動的特性と演奏者の身体動き大きさの関係性については「楽曲の動的な特性に関わらず，演奏者の身体動きの大きさが演奏評価に及ぼす影響は見られない」という結論が得られた。

これらの結果は，より望ましい演奏評価方略の構築において有益な指針になるものと考えられる。